

過労死ゼロ読書感想文⑥

岩波ブックレット「過労死110番」を読んで

私の過労死に対するイメージは、「働いていて死ぬほどしんどければ逃げればいいよ。」と本書に書かれているようなイメージをもっていました。ただ、同時に、「仕事から逃げられない思考に浸かってしまう」から逃げられなくなってしまうんだらうなというイメージも同時に持ち合わせていました。

この「過労死」といい言葉は、昔からあったわけではないそうです。本書によると、過労死は、

「世界中のどこでも見られる社会問題でもありません。残念ながら、「過労死」は日本で生まれ、現代用語として社会的に認知され始めた一九八〇年代後半から三〇年異常を経過する中、この事象は今もなお、現代日本社会の負の側面を大きく映し出す社会問題としてはびこっています。」

と述べられています。その認知の大きなキッカケになったのが、広告代理店の電通入社二年目にして、長時間労働や上司からの「靴に入れたビールを飲め」というようなパワハラ行為の基、自殺した事件です。このような状態が明らかに異常だということは、自明の理でしょう。この事件について、最高裁判所が「長時間の労働等過重な業務により、疲労や心理的に蓄積すると心の健康を損ねることは周知のところである、使用者は心身の危険」や「それを未然に防止する義務がある」という被災者遺族側の全面的な勝訴判決を当時出したことが大きなきっかけになったそうです。

過労死や、それに準ずるような精神疾患の発症のような状況を脱するには、どのようなことに取り組めばよいのでしょうか。

「脱・会社人間」志向として本書で取り上げられていた、若者層の考え方がその解決策を示唆しているように感じます。つまり、一つの会社に縛られることなく、多様な働き方。例えば、複業、兼業、副業、フリーランスなどの働き方が認められるようになることがその1つの解決策ではないでしょうか。もちろん、会社で働くという働き方も含めて認められていく必要があると思います。

また、ライフワークバランスと呼ばれているうちの「ライフ」の充実について見直していくことが大事なのではないかと考えます。

最後に、本書を読み終わって、過労死をこれからなくすことの必要性をさらに感じました。同時に、自殺までに至らなくても、精神疾患にかかるような人々も減ってほしいという願いも持ちました。過労にもそれぞれの職種によってそれぞれの事情があると思います。その事情をしっかりと発信したり、広めたりすることもまた大事だと感じられました。